王妃グウィネヴィアの最期
—マロリーと二つの原拠—

秋　篠　憲　一

はじめに

詩人でありラファエル前派の画家（Pre-Raphaelite）でもあるD. G. ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti）の水彩画に『アーサーの墓』（*Arthur's Tomb*）がある．この作品は，王妃グウィネヴィア（Guinevere）とランスロット（Lancelot）の最後の出会いを描いている．王妃を愛しているランスロットが，修道女として神に仕える日々を送る王妃にグラストンベリー（Glastonbury）まで会いに来て，彼女にキスを乞い，彼女はそれを拒絶する．ただし，不倫の恋に墜ちた二人の再会の場所がランスロットの主君アーサー王の墓で，墓の蓋のアーサーの彫像の頭上で，身を乗り出して，アーサーの妻にキスを迫る．王妃は左手で彼の顔を遮り，拒絶の態度を示す．王の眠る墓石の側面には在りし日のキャメロット（Camelot）の光景が，左部分には王と王妃にかしずくランスロットの姿が，右の部分には円卓騎士団の前に現れた聖杯が描かれている．そして絵の左下には草むらでとぐろを巻く蛇が描かれ，ランスロットと王妃の愛の罪深さを表している．まさにこの絵は，アーサー王物語の核心部分をみごとに描ききっている．ロセッティの愛読書はトマス・マロリー（Thomas Malory）の『アーサー王の死』（*Le Morte D'Athur*）であり，この水彩画は，マロリーの作品で描かれるアームズベリ（Almesbury）の修道院でのランスロットと王妃の最期の別れから影響を受けたと考えられる．それではマロリーは，この修道院での二人の別れの場面をどのように描いているのであろうか．彼は，アーサー王伝説の集

大成とも言うべきロマンスを書くにあたって，二つの材源を使っている．一つは，13 世紀のフランスで，散文で書かれた作者不詳の「流布本物語群」(The Vulgate Cycle) の一部である『アルチュールの死』(*Mort Artu*, 以下 *MA* と略す) であり，もう一つは，14 世紀のイギリスで英語で書かれた八行連詩の『アーサーの死』(*Le Morte Arthur*, 以下 *MH* と略す) である．彼は独自の恋愛論を次のような言葉で締めくくる，"...whyle she lyved she was a trew lover, and therefore sha had a good ende" (1120.12-13)．マロリーは二つの原拠うちどちらを重視し，またそれをどのように翻案して王妃の "good ende" を描き出したのか．私の知る限り今まで指摘されることのなかった彼の翻案の特徴について，王妃の贖罪に焦点を当てながら論じてみたい．

Dante Gabriel Rossetti, *Arthur's Tomb* (Watercolour, 1855).
The British Museum.

I

MA（テキストとしては，J. フラピエ［Jean Frappier］版を使う）では，アーサー王の息子であり甥でもあるモルドレッドの反乱の後の王妃グウィネヴィアの描写は，マロリーそして作者不詳の *MH* にくらべて極めて少ない．*MA* では，王妃は悔悛のために修道院に入るのではない．それでは，彼女はどのような心境におかれ，何のために修道院に入るのか詳しく述べていきたい．また *MA* の諸写本のなかでは，ヴァティカン写本パラティヌス・ラティヌス（Palatinus Latinus）1967 を除いて，修道院でのランスロットと王妃の別れの場面は描かれない．本論文では，このヴァティカン写本（以下 *PL* と略す）の別れの場面についても詳述したい．

アーサーに代わって王位についた反逆者モルドレッドは，王妃に結婚を迫る．王妃はロンドン塔に立てこもって抵抗するが，ある日アーサー王軍が本国へ帰って来るという知らせが王妃のもとに届く．彼女はこのとき複雑な心境になる．やっと自分は自由の身になれると思う反面，夫が戦いで殺されるのではないかと恐れる．どうすべきか思い悩む彼女のもとに信頼できるいとこのラボール（Labor）がたまたまやって来る．悲しみのあまり涙に暮れる彼女に彼はどうしたのかと理由を尋ねる．王妃は以下のように心の内を正直にうちあけるが，この内面吐露に修道院行きの動機が見えてくる．

> Dont le vos dirai ge . . . ; en cest pensé m'ont mis deus choses: l'une, que ge voi que messires li rois est entrez en ceste bataille et, se Mordrés en vient au desus, il m'ocirra; et se mes sires a enneur de ceste bataille, il ne porra croire en nule maniere que Mordrés ne m'ait conneüe charnelment, por la grant force qu'il a mise en moi avoir; si sei veraiement qu'il m'ocirra, si tost comme il me porra tenir as meins. Par ces deus choses poez vos veoir apertement que ge ne puis eschaper que ge ne muire ou d'une

part ou d'autre. Or gardez se ge puis estre granment a ese. (217)

Then I'll tell you. . . . Two things have made me feel this way: first, the fact that I see that my lord the king has entered this battle and, if he is defeated, Mordred will then kill me. But if my lord is victorious in the battle, he'll never believe that Mordred didn't sleep with me, considering all the force he used in trying to get to me, and so I know the king will kill me as soon as he gets his hands on me. Bcause of these two threats, you can clearly see that I can't avoid dying one way or the other. Now tell me whether there's any way I can be at peace. (Lacy IV 147)

死におびえる王妃に対して，彼は，アーサー王は王妃が考える以上に慈悲深く，あとは神に祈るしかないと助言する．その夜，恐怖におびえた彼女はほとんど眠ることもできず，翌朝，母親も晩年を過ごした修道院へ赴く．

王妃は女子修道院長に，修道院に入れて欲しいと頼む．修道院長は，アーサー王が亡くなったあとなら修道女として受け入れましょう，しかし生きておられる間に，王妃を修道院に入れたとなれば，われわれの命も危ないと言い，さらに王妃は，修道院での厳しい修行の毎日には耐えられないであろうと忠告し，王妃の申し出を断る．これに対して，王妃は

Dame, . . . se vos ne me recevez, il en sera de pis a moi et a vos; car se je m'en vois de ci et il m'en mesavient par aucune aventure, li damages en sera miens, et li rois vos demandera mon cors, de ce soiez toute seüre, car par vostre defaute me sera il mesavenu. (218)

Lady, . . . if you don't accept me, it will be the worse for me and for you, because if I leave here and by chance some disaster befalls me, I will suffer for it, but since the disaster would be your fault, you can be sure that the king would take revenge on

you. (Lacy IV 147)

と応じる．修道院長へのこの脅迫めいた言葉は，王妃の苦悩と不安を如実に表している．そこで修道院長は，モルドレッドが勝利すれば，王妃を修道院に受け入れるが，もしアーサー王が勝てば，王と王妃との仲を取り持とうと言い，戦いの決着がつくまで王妃は修道院にとどまることになる．そして語り手は，"En tel maniere demora la reïne leanz avec les nonnains et s'i mist por la poor qu'ele avoit del roi Artu et de Mordret" (219) ["Thus the queen stayed there with the nuns, taking refuge because of her fear of both King Arthur and Mordred" (Lacy IV 147)] と述べ，王妃が "la poor" (恐れ) のために修道院に入ったことが強調される．

このあと *MA* では，アーサー王の死とモルドレッドの二人の息子が国土を支配しようとしていることを知った王妃は，彼らに殺されることを恐れて修道女の衣を身にまとうこととなる．そして，イギリスへやって来たランスロットは，モルドレッドの二人の息子と戦うことになるが，その戦いの日に王妃の悲報がもたらされる．次の引用では，王妃の不純な修道院入りの動機とは対照的に，修道女になった後の彼女の悔悛ぶりが語られる．しかしながら，王妃が，何の罪をどのように悔いたかは一切明らかにされない．特に，"repentance" の詳細がわからない．彼女への言及はこれが最後で，王妃はあっけなくこの物語から姿を消してしまう．

> . . . et Lancelos chevaucha entre lui et sa compaignie, mes il estoit si corrouciez et si tristres que nus plus; car le jor meïsmes que la bataille dut estre li furent nouveles dites que la reïne sa dame estoit morte et trespassee de cest siecle tierz jor avoit passé; et tout einsi estoit il avenu com l'en li avoit dit, car la reïne estoit trespassee de cest siecle nouvelement; mes onques haute dame plus bele fin n'ot ne plus bele repentance, ne plus doucement criast merci a Nostre Seigneur qu'ele fist. (254)

> Lancelot and his company were approaching, and no one could have been more enraged and grief-stricken than he, for on the very day when the battle was to take place, he had received the news that his lady the queen had died and departed this world three days before. And it had happened just as he was told, for the queen had recently left the world. But never had a lady met a finer death or repented more nobly, nor had any lady more fittingly asked our Lord's mercy, than had she. (Lacy IV 157)

フラピエ版 *MA* にある "Appendice: Dernière Entrevue de Lancelot et de Guenièvre" (264-66) の *PL* のテキストによれば，モルドレッドの二人の息子との戦いのあと，ランスロットは，森のなかにある女子修道院にたどり着く．修道女姿の王妃を見て彼は失神する．やがて我に返った彼は，彼女が尼僧になった訳を聞く．王妃は，"pour doutance des deus fiz Mordret" (265) すなわちモルドレッドの二人の息子を恐れたために尼の衣をまとうことになったと思わず本音を語る．ここでも，彼女の口を通して，信仰心ではなく死への恐怖から尼僧になったことが強調される．ランスロットは，反逆者の二人の息子は殺され，王妃が望めば，ログレスの国の女王にもなれると励ます．これに対して王妃は以下の引用のように二度と俗世には戻らないと告げる，

> Ha! ha! biaux douz amis, j'ai eü tant de biens et tant d'onneurs en cest siegle que onques n'en out nule dame autant ne jamais n'avra, et vous savez bien que nous avons fait moi et vous tele chose que nous ne deüssiens avoir faite; si m'est bien avis que nous deüssiens user le remenant de nos vies ou servise Nostre Seigneur. Et bien sachiez que je ne seré jamais au siegle, car je sui ceanz rendue por Dieu servir. (265)
>
> Oh, my dear friend, I've had more goods and honors in this

> world than any lady has ever had or ever will have, and you know that you and I have done things we should not have done. So I believe we should spend the rest of our lives in the service of Our Lord. And you should know that I will never again be a part of the world outside, for I have come here to serve God. (Lacy IV 158)

王妃は“. . . nous avons fait moi et vous tele chose que nous ne deüssiens avoir faite”［you and I have done things we should not have done］と述べるが，修道院長がそばにいるせいか，己の犯した罪に関して極めて曖昧な表現を使う．また“j'ai eu tant de biens et tant d'onneurs en cest siegle”［I've had more goods and honors in this world］にはやはり彼女の俗世に対する執着が伺える．マロリーが描く王妃はランスロットと修道女たちの前で，“Thorow thys same man and me hath all thys warre be wrought, and the deth of the moste nobelest knyghtes of the worlde; for thorow oure love we have loved togydir ys my most noble lorde slayne”（1252.8-11）と告白し，彼との不倫の愛がアーサー王の死と円卓騎士団崩壊の原因となったことを認める．このことに関しては，のちに詳述する．ランスロットは，自身も神に仕える日々を送ると述べ，三日目に王妃と別れるが，この間の二人の行動，会話については一切語られない．そして二人の別れについて語り手は次のように語る．

> Et Lancelos li prie que ele li pardoint tous mesfaiz, et ele dist que si fet ele mout volantiers; si le bese et acole au departir. . . . (266)
>
> Lancelot asked her to pardon him for all his offenses, and she replied that she would do so willingly. She embraced and kissed him when they separated. (Lacy IV 158)

別れ際には，王妃の方から彼にキスし抱擁する．これもこの後詳述するが，

MH とマロリーでは，ランスロットの方から接吻を懇願するが，王妃はきっぱりとそれを拒絶する．彼と別れたあと，彼女はアーサーとランスロットの魂のために祈り，神に仕える日々を送り，彼との別れから一年のちにこの世を去る．以上が *PL* の修道院での二人の別れのエピソードの内容である．

ここで興味深いのは，*PL* で，なぜ不倫の罪を犯した二人の別離のエピソードが挿入されたかである．いつ誰が挿入したのかは明確ではないが，その人物は，もともとの物語では，王妃の死があっけない程短く語られ，せめて彼女への愛を貫いたランスロットとの別れの機会をつくってやり，この最後の出会いの場面が，物語が幕を閉じる前の感動的シーンになると考えたのではないか．その場合，王妃の人物像の点では，その前の描写と矛盾があってはだめで，特に己の罪を悔いて，神への一途な信心のゆえに修道院へやって来た彼女ではないゆえに，ランスロットとの会話，行動もそのことを反映したものになったのであろう．他の写本でもこの *PL* でも，修道女の衣をまとった彼女の死ぬまでの敬虔な日々は，彼女の修道院入りの動機から考えると唐突である．彼女が修道院でどのような心境で日々を送ったのかは描かれない．隠者となったランスロットの魂が多くの天使たちによって天国へ導かれていくのを夢にみたカンタベリーの大司教は，“. . . penitance vaut seur toutes choses; jamés de penitance ne me departirai tant com ge vive”（262）[. . . penitence is more important than anything else, and never will I give it up as long as I live]（Lacy IV 159）と贖罪が何にもまして価値あるものであると言うが，*MA* そして *PL* の挿入されたエピソードでは，不倫の罪をランスロットとともに犯した王妃の “penitence” の詳細が語られない．別れ際にランスロットを抱擁し，キスした王妃に果たして真の贖罪が可能であったのであろうか．

II

それでは14世紀中頃に書かれた英国図書館（British Library）所蔵のハーリー（Harley）2252写本に収められた*MH*（テキストはヒッシジャー［Hissiger］版を用いる）のランスロットとグウィネヴィアの修道院での別れのエピソードの分析に入りたい．ちなみにこの詩は500の八行連から成り立っており，基本的な押韻形式はababababである．またこの作品の作者が典拠としたのは*MA*である．このロマンスでは，*PL*にある王妃とランスロットとの修道院での再会と別れが描かれるので，この詩人が，*PL*と同じように修道院の場面を挿入した*MA*の写本を原拠にした可能性がある．しかし二つの場面に大きな相違があり，それを詩人の巧みな翻案の技と考えるか，あるいはこのエピソードを含まない写本から，詩人が独自にこのエピソードを考え出したのか不明である．E. D. ケネディー（Edward Donald Kennedy）が，王妃とランスロットの罪によりアーサー王の宮廷が崩壊したことを強調したい作者であれば，原拠がなくても容易にこのシーンの着想を得たであろうと論じているように（104），原拠の翻案において巧みな技を見せるマロリーが，後に述べるように，多大な影響を受けたこの詩人が独自にこの挿話を創出した可能性は否定できない．さらに，マロリーが聖杯探求の終わった後の円卓騎士団崩壊までを描く時に用いた典拠の一つがこの*MH*である．マロリーは*MA*も典拠として使っているが，修道院の場面は，この詩の翻案である．これについては，のちほど詳述する．

アーサー王を助けるためにイギリスへやって来たランスロットは，アーサーとモルドレッドの戦い，そして王妃が行方しれずであると聞かされ悲嘆にくれる．仲間の騎士たちと別れひとりで王妃を捜し求める．たまたま幸運にも，王妃がいる修道院にたどりつく．そこにいた尼僧姿の王妃を見て狂ったように泣く．また彼女も彼の姿を見て三度失神する．彼女は自分の部屋へ運ばれ，そこにランスロットもやって来る．ランスロット，女子修道院長，

修道女たちの前で彼女は己が犯した罪とそれがもたらした災いについて包み隠さず告白する．彼女の修道院入りについては，すでに

Whan Quene Gaynor, the kynges wyffe,
Wyste that all was gone to wrake,
Away she went with ladys fyve
To Aumysbery, a nonne hyr for to make.
Therin she lyved an holy lyffe,
In prayers for to wepe and wake,
Nevyr after she cowde be blythe.
There weryd she clothys whyte and blake.（3566-73）

と語られており，アーサーと反逆者との戦いの結果を知ったのちに修道院へ入り，彼女の祈りにくれる神聖な日々が示される．以下の引用では，*PL* にはない彼女の贖罪の意識の強さが描かれる．

Abbes, to you I knowlache here
That throw thys ylke man and me,
For we togedyr han loved us dere,
All thys sorowfull werre hathe be.
My lord is slayne that had no pere,
And many a doughty knyght and free,
Therefore for sorowe I dyed nere
As sone as I evyr hym gan see.

Whan I hym see, the sothe to say,
All my herte bygan to colde
That evyr I shuld abyde thys day
To se so many barons bolde
Shuld for us be slayne away.

Oure wylle hathe be to sore bought sold,
But God that all myghtis maye
Now hathe me sette where I wyll hold.

Isette I am in suche a place;
My sowle hele I wyll abyde,
Telle God send me som grace
Throw mercy of hys woundys wyde
That I may do so in thys place,
My synnys to amende thys ilke tyde,
After to have a syght of hys face
At domysday on hys ryght syde. (3638-61)

ランスロットと修道女たちを目の前にして，彼女はいきなり，彼と自分が愛し合ったことにより，悲惨な戦いが引き起こされたとはっきり告白する．"sorowfull" と "sorowe" という言葉は，己の罪を悔いる彼女の内面を表している．あたかも聴罪司祭を前にしての悔悛の秘蹟のようである．G. チョーサー（Geoffrey Chaucer）の『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*）では，教区主任司祭が贖罪（penitence）は "Contricioun of Herte, Confessioun of Mouth, and Satisfaccioun"（*The Parsons' Tale* 107［L. D. ベンソン（Larry D. Benson）版］から成り立っていると説教するが，王妃の場合，心の痛悔，口頭での告白，修道院での苦行によつてその条件のすべてを満たしている．J. ベストン（John Beston）と R. M. ベストンは（Rose Marie Beston）"While she is deeply troubled that her love has brought about the death of 'many A doughty knight And free,' she does not refer to it as sinful or adulterous. The love of Lancelot and Guinevere is always presented as glorious in itself"（253）と論じるが，"Oure wylle hathe be to sore bought sold"（E. E. フォスター［Foster］はこの箇所を "Our desire [passion] has

been too painfully bought and paid for" と解釈している［114］）には，高い代償を余儀なくさせた愛への後悔の念が現れている．"my synnys to amend" は，一見特定の罪を指してはいないように見えるが，二人の不倫の罪が含まれていると解釈すべきである．夫を含め多くの騎士たちを死に追いやった愛が彼女にとって "glorious" であるはずがない．

MH では，折り返し語句（refrain）が効果的に使われているが，S. L. J. ジェイク（Sharon L. Jansen Jaech）が "In this scene, the poet has pulled together threads that have been throughout the narrative fabric: the connection between love and death, between 'The love that hath us be between' and the fight 'Til one of us have other slain'" (67) と指摘するように，まさにこの詩の核心部分，不倫の愛がもたらす円卓騎士団の崩壊がこの折り返し語句に集約され，しかも王妃による告白の場面に使われるのである．またスタンザ連結語（stanza-linking）も駆使され，"I evyr hym gan see" と次のスタンザ冒頭の "Whan I hym see" が，彼女が神に帰依している修道院で，罪深い愛の相手であるランスロットを見た衝撃を伝えている．そして "My synnys to amend" は彼女の修道院入りの堅い決意を表しており，神の恩寵によって最後の審判の日にイエス・キリストの右側に座れるように努めたいという彼女の一途な願いを描いている．

次に，彼女は，ランスロットに向かって言う．ここでは，先ほどの彼女の悔悛を描いたスタンザと結ぶスタンザ連結語は使われず，彼女のランスロットとの決別の言葉が語られる．贖罪の故にランスロットとの関係を絶つという彼女の思いが連結語の欠如によって効果的に描写される．彼女は，彼に，フランスへ帰り，妻を娶り愛するように促す．そして ". . . I beseche the in all thynge, / That newyr in thy lyffe after thysse / Ne come to me for no sokerynge, / Nor send me sond but dwelle in blysse. / I pray to God evyrlastynge / To graunte me grace to mend my mysse" (3672-77) と述べ，今後二度と彼とは会わず，接触はしないと，断固とした決別の気持ちを伝え

る．既述した *PL* では，このランスロットへの結婚の促しと決別の言葉はない．王妃の，二人の愛が円卓騎士団の破滅の要因をなしたというはっきりとした罪意識とともに *MH* の独自性を示している．このあとランスロットは，"Tyll God us departe with dethes dere, / To penance I yeld me here as blythe" (3704-05) と言い，グウィネヴィアと同じように神に仕える日々を送ると誓う．しかし神が死によって我々を引き離すまでという彼の言葉は "penance" という語を使いながらも王妃への愛を断ち切れない彼の姿を示している．次の行では，冒頭にスタンザ連結語 "All blyve to penance I wyll me take" (3706) が使われ，"penance" の重要性が示される．このスタンザの冒頭で "penance" が使われるわけであるが，このスタンザは，"Kysse me, and I shall wende as tyte" (3713) " で締めくくられる．ここでの "penance" の意味としては，*Middle English Dictionary* によれば，"repentance, contrition, a life of renunciation and asceticism, pain, hardship" が考えられる．"penance" を神に誓った王妃にキスを懇願するランスロット．神への忠誠心の違いが語られる．*PL* では，王妃の方から彼にキスするが，この詩では，王妃はその懇願をきっぱりと拒絶する．次に引用する言葉が彼女の彼への最後の言葉であり，また *MH* で彼女が吐く最後の言葉である．特にこのスタンザの最後の４行は，この作品のメッセージであり，この詩人がいかにグウィネヴィアという登場人物に大きな役割を与えているかがわかる．R. A. ワータイム (Richard A. Wertime) は彼女の役割について，*MH* 研究でしばしば引用される論文の中で，"The queen, though the most self-oriented of the characters, is important primarily as a causal factor in the breakup of Arthur's court; this accomplished, she becomes little more than a passive object of dispute, and effectively disappears for a large part of the action" (1076) と論じるが，この解釈では不十分である．なぜなら，彼女が "self-oriented" から "God-oriented" へと，自らの意志で贖罪することに言及せず，しかも物語の終盤において，この作品の宗教性を一身に担う程の重要な役割を王妃

が与えられていることを見落としているからである．しかもこの詩は，王妃の埋葬で幕を閉じるのである．これも独創的な終わり方である．

"Nay," sayd the quene, "that wyll I not.
Launcelot, thynke on that no more;
To absteyne us we muste have thought
For suche we have delyted in ore.
Lett us thynk on Hym that us hathe bought,
And we shall please God therfore;
Thynke on thys world how there is noght
But warre and stryffe and batayle sore." (3714-21)

隠者となってこの世を去ったランスロットの亡骸は，彼の遺言通り喜びの砦に埋葬される．そのあと彼の弟エクター（Ector）そしていとこのボース（Bors）たちは，アームズベリー修道院へやって来るが，そこで王妃の死を知る．"Dede they faunde Gaynor the quene / With roddys feyre and rede as chery:" (3955-56) と彼女の死に顔が描かれ，死んで間もない王妃の亡骸 "her body in a state like that described in many a saint's life" (Tolhurst 293) を見る．そしてグラストンベリーにすでに埋葬されているアーサー王の傍らに彼女を埋葬する．*MA* では二人は別々の場所に埋葬されるが，この点でもこの詩人の翻案の特徴が示される．

Ⅲ

マロリー作『アーサー王の死』(テキストはヴィナヴァー [EugèneVinaver] 版を用いる）でも，グウィネヴィアの修道院入りとランスロットとの再会が描かれる．アーサー王とモルドレッドの死を知った王妃は侍女五人を連れアームズベリーの修道院へ行く．尼となった彼女の苦行について "penaunce" と "synfull" という言葉を使いながら " . . . there she lete make herselff a

nunne, and wered whyght clothys and blak, and grete penaunce she toke uppon her, as ever ded synfull woman in thys londe" (1243.4-7) と語られる．そして "fastynge, prayers, and almes-dedis" (1243.8-9) の日々を送り，". . . all maner of people mervayled how vertuously she was chaunged" (1243.9-10) とその改心ぶりが強調され，しかも女子修道院長になるのである．

イギリスに到着したランスロットは仲間の騎士と別れて王妃を捜し求める．やがてアームズベリーの修道院にやって来る．回廊を歩いている彼を見た王妃は三度失神し，彼を連れてくるように侍女に言う．そしてランスロット，侍女，貴婦人たちの前で，彼との愛によってもっとも高貴な騎士たちが殺されたこと，修道院入りの理由，そして彼との決別を述べる．

> Thorow thys same man and me hath all thys warre be wrought, and the deth of the moste nobelest knyghtes of the worlde; for thorow oure love that we have loved togydir ys my moste noble lorde slayne. Therefore, sir Launcelot, wyte thou well I am sette in suche a plyght to gete my soule [hele]. And yet I truste, thorow Goddis grace and thorow Hys Passion of Hys woundis wyde, that aftir my deth I may have a syght of the blyss[ed] face of Cryste Jesu, and on Doomesday to sytte on Hys ryght syde; [fo]r as synfull as ever I was, now ar seyntes in hevyn. And there[f]ore, sir Launcelot, I requyre the and beseche the hartily, for all the lo[v]e that ever was betwyxt us, that thou never se me no more in the visayge. And I commaunde the, on Goddis behalff, that thou forsake my company. And to thy kyngedom loke thou turne agayne, and kepe well thy realme frome warre and wrake, for as well as I have loved the heretofore, myne [har]te woll nat serve now to se the; for thorow the and me ys

the f[lou]re of kyngis and [knyghtes] destroyed. And therefore [go] thou to thy realme, [an]d there take ye a wyff, and lyff with [hir wyth] joy and blys. [A]nd I pray the hartely to pray for me [to] the Everlastynge Lorde [tha]t I may amende my mysselyvyng. (1252.8-29)

この引用の冒頭部分には，すでに指摘した *MH* で使われている二人の愛とそれがもたらす破滅の折り返し語句の影響が見られる．マロリーがこの場面を書くときに *MH* を使っていると考えられるが，これがその証拠の一つである．そして最後の審判の日にイエス・キリストの右側に座ること，また上記引用の後半部分と *MH* の "My company thow aye forsake, / And to thy kyngdome thow take thy way, / And kepe thy reme from werre and wrake, / And take a wyffe with her to play, / And love wele than thy worldys make." (3664-68) は共通点が多い．またマロリーの引用の最後の 2 行は，*MH* では，"I pray to God evyrlastynge / To graunte me grace to mend my mysse." (3676-77) となっており，違いは，マロリーでは，王妃がランスロットに，罪深い人生を贖うことがきるように神に祈って欲しいと頼んでいることである．しかしながら，この箇所も *MH* の書き直しと考えられる．

王妃の言葉に対して，ランスロットは ". . . the same desteny that ye have takyn you to, I woll take me to, for to please Jesu. . . ." (1253.4-5) と述べるが，王妃は "But I may never beleve you . . . but that ye woll turne to the worlde agayne." (1253.8-9) とランスロットの本心を見抜く．*MH* でも "'A, wylte thow so,' the quene gan say, /'Fullfyll thys forward that thou has ment?'" (3694-95) と王妃はランスロットの決心に疑いを持つ．L. D. ベンソンが，"Guenevere truly repents of her love for Lancelot, and she takes the veil to atone for that sin. Lancelot enters the religious life not because he forsakes his earthly love but because he remains true to it" (244) と論じているように，聖杯探求の時も，森の隠者に対して，ある王妃

（グウィネヴィアの名前を隠す）を節度を超えて愛してきたと罪の告白をするが（“. . . he [Lancelot] tolde there the good man all hys lyff, and how he had loved a quene unmesurabely and oute of mesure longe.” [897.15-16]），聖杯探求が終わると，神との約束を忘れ，王妃との罪深い関係にのめり込む．彼はこの世の愛を捨て去ることができないのである．

そしていよいよこの修道院の場面の最大の山場がやってくる．詩人であり画家でもあるロセッティの想像力を刺激した，王妃によるキスの拒否の場面である．“. . . I praye you kysse me, and never no more”（1253.26）と懇願するランスロットに，“Nay, . . . that shal I never do, but absteyne you from suche werkes”（1253.27-28）と拒絶する．そして嘆きのために二人は何度も失神し，彼は修道院を去る．王妃の失神は彼女の心の葛藤の激しさを表している．D. アームストロング（Dorsey Armstrong）は，王妃による接吻の拒否を以下のように解釈している．

> That the tension between homosocial bonding and heterosexual desire has ceased to have any functional meaning is demonstrated by Guenevere's refusal to kiss Lancelot when they part for the third and final time at the end of the *Morte d' Arthur*. She recognized that the chivalric enterprise—and the homosocial subcommunity that has been its center—has failed. . . . The kiss, symbolic of knightly heterosexuality, no longer has any relevance, a fact that Guenevere realizes, but Lancelot, clearly does not. (202)

騎士の貴婦人への愛である “knightly heterosexuality” を象徴するキスは，男の騎士たちの絆が創り出す騎士社会が崩壊したがゆえにもはや何の意味もない．そして王妃の神への帰依とランスロットへの接吻の拒否は円卓騎士団と二人の愛の緊張関係の終焉を意味するという解釈である．確かに王妃の修道院入り前までは，この緊張関係がプロットを主として展開させていくが，

この接吻の拒否が意味するのは，王妃の心の中での葛藤の結果ではないのか．ここにあるのは，贖罪と愛の葛藤である．彼が求めるキスは単なる儀礼的な別れのキスではなく，二人の愛の証のキスであり，王妃もそのように理解したのであろう．“absteyne you from suche werkes” は，キスが再び罪深い愛へと二人を導いていくことを恐れる王妃の言葉である．このキスの拒絶は，チョーサーの教区主任司祭の説く “penitence” の象徴でもある．“knightly heterosexuality” の象徴であるキスを彼に与えることは贖罪に反する行為なのである．“amend my mysselyvyng” すなわち罪深い人生の日々を償うために王妃は修道女となったのである．神への忠誠か，愛するランスロットへの忠誠かのどちらかを選択しなければならないのである．彼女は神への忠誠を選んだのである．彼女の ”Nay” には罪深い過去とランスロットへの決別，そして神への忠誠の意味がこめられている．アームストロングは王妃がアーサー王が企てた理想的な騎士社会（“chivalric enterprise”）が崩壊したことを認識していると述べるが，王妃は崩壊の要因となった自分たちの愛の罪深さを認識するのである．

王妃と別れたランスロットは，グラストンベリーにある隠者の庵にやって来る．そして礼拝堂でミサを唱えていたカンタベリー大司教に，悔悛の秘蹟を請い，僧衣をまとい，六年間にわたって苦行の日々を送り，さらに一年間，司教の衣を身にまといミサを唱えた．そしてある夜のこと，幻が現れ，罪の赦しのために（“in remyssyon of his synnes” [1255.15]）アームズベリーへ行き王妃の亡骸をアーサーの傍らに埋葬するように命じる．「罪の赦しのため」とは以下のことを意味する．王妃の埋葬のあと，ランスロットは大司教に “. . . whan I sawe his corps and hir corps so lye togyders, truly myn herte wold not serve to susteyne my careful body. Also whan I remembre me how by my defaute and myn orgule and my pryde that they were bothe layed ful lowe . . . this remembred, of their kyndenes and myn unkyndenes, sanke so to myn herte that I myght not susteyne

myself" (1256.31-38) と，悲しみの内に王と王妃の墓前で罪の告白をする．二人の亡骸が彼の告白を引き出すのである．このあと自ら罪深き身体に苦行を課し，食事も水もほとんど絶ち，二人の墓の前で祈り続けてこの世を去る．したがってこの告白，贖罪，罪の赦しのためには，王妃の亡骸のアーサー王の傍らへの埋葬が極めて重要なのである．

女子修道院に到着したランスロットであるが，王妃はほんの30分前に亡くなっていた．マロリーは，*MH* とは違って，再度二人を会わせる．しかし30分のずれをつくり，生きたままでは再会させない．彼は，王妃の侍女たちから死の直前の王妃の言葉を聞かされる．王妃は，彼が自分の亡骸をアーサー王のそばに埋葬してくれると述べ，さらに次のように神に祈ったという，"I beseche Almyghty God that I may never have power to see syr Launcelot wyth my worldly eyen!" (1255.36-37)．最後の接吻を拒んだ彼女は，神への忠誠をはっきり示した．そしてランスロットに二度と彼女に会わないよう命じた以上，この世で再び彼と会うことなく贖罪を全うできるよう神に祈るのである．マロリーはわずか30分の時間のずれをつくることによって，神の恩寵が彼女に与えられたことを示し，しかもランスロットにはまだ頬に赤みが残るような彼女の死に顔との対面の機会を与えてやるのである．この30分の時間のずれは，おそらく，*MH* でボースたちが見た"...Gaynor the quene / With roddys feyre and rede as chery" (3955-56) から得た発想であろう．王妃の贖罪への思いを知ったランスロットは己自身の贖罪へと導かれ，やがて遺言を遺して死んでゆく．その遺言の一つは，喜びのとりでへの己の亡骸の埋葬ともう一つは，ボース，エクターたちに聖地での戦いを願うものである．実は，この聖地での戦いは，*MH* でランスロットがアーサー王とガウェインに和解を申し出るときに，"He [Lancelot] wolle rape hym on a resse / Myldely to the holy londe, / There to lyve withouten lese / Whyle he is man lyvande" (2664-67) という条件を提示したことから着想を得たものであると私は考える．このようにマロリーは，王妃とランスロッ

トの最期を描くときに *MH* から大きな影響をうけ，それを独自に翻案したのである．

マロリーは，彼の恋愛論の中で，“But firste reserve the honoure to God, and secundely thy quarell muste com of thy lady. And such love I calle vertuouse love”（1119.28-30）と述べ，まず神を第一とし，次に愛する女性のために闘うような愛を純潔な愛と呼ぶ．もちろん神をないがしろにする罪深い不倫の愛は純潔の愛ではなく，王妃を “a trew lover” と呼び，彼女に “a good ende” を与えるのである．マロリーが使った *MA* の写本に修道院での恋人たちの再会の場面が含まれていたかどうかはわからないが，*MH* に描かれた王妃によるランスロットへの口づけの拒否は，マロリーにとって衝撃的とも言える行為であったに違いない．流布本物語群の『ランスロ』(*Lancelot*) では，王妃と彼のはじめてのキスシーンが次のように描かれる（テキストは A. ミシャ［Alexandre Micha］版を使う），“Et la roine voit que li chevaliers [Lancelot] n'en ose plus faire, si le prent par le menton et le baise devant Galahot assés longuement . . .”（Micha 115-16）[Seeing that the knight dared do no more, the queen took him by the chin and gave him a prolonged kiss in front of Galehaut . . .]（Lacy II 146）．この口づけは，ランスロットを愛する騎士ガルオー（Galehaut）の仲介によって実現したものである．まさに王妃によるキスの拒絶は二人の愛の終焉を意味する．マロリーは *MH* の詩人のこの独創性に刺激されて，王妃の立派な最期を自分なりのやり方で描こうとしたのではないであろうか．しかも “therefore she had a good ende” を独自の恋愛論の最後にもってきたのである．彼女の愛は誠の愛と言っても罪深い愛である．しかしその罪を犯したればこそ，おのれの過ちを悔い，贖罪行為によって神のもとへ導かれて行ったのである．そして彼女の “good ende” が彼女が愛したランスロットの “good ende” をもたらすのである．恋愛論にはランスロットへの言及が一切ないが，それは彼女の贖罪がなければ彼の魂の救いも可能ではないことを示している．

おわりに

既述したロセッティの絵に触発されてW. モリス（William Morris）が「アーサー王の墓」（"King Arthur's Tomb"）を書いた．"Yea once, once for the last time kiss me, lest I die" (206) と願うランスロットに対して王妃は，"Across my husband's head, fair Launcelot! / Fair serpent mark'd with V upon the head! / This thing we did while yet he was alive, / Why not, O twisting knight, now he is dead?" (209-12) と応じる．ランスロットをV字の頭を持った毒蛇にたとえ，このあと，彼のアーサーへの裏切り行為を述べる．王妃の叱責の言葉に衝撃をうけた彼は主君の墓の前で失神する．そして彼を残して王妃は去っていく．王妃のキスの拒否は "neither her love of Christ nor her fear of hell . . . but the carved figure of King Arthur" (Hollow 450) のゆえなのである．モリスは，ロセッティの絵に描かれたアーサーの墓の上における，王妃のキスの拒否に，詩人なりの解釈を加えたのである．このように王妃のキスの拒否は我々に様々なことを問いかけてくる．しかも現存する写本に関する限り，14世紀に英語で書かれた *MH* ではじめてこのキスの拒絶が描かれたのである．フランスで書かれた *MA* の諸写本では，*PL* を除いて，王妃とランスロットの修道院での再会の場面は登場せず，*PL* においても王妃自らランスロットにキスをし，その悔悛ぶりに疑問をもたせるが，*MH* においては，彼女の贖罪が描かれ，それを象徴するのが彼女のキスの拒絶である．そしてマロリーが典拠とした *MH* が，その宗教性の点で彼に大きな影響を与え，恋愛論で王妃に "good ende" を与える要因となったのである．しかも想像力を刺激された彼は，死の直前の王妃の神への祈り，死後30分の王妃とランスロットの対面，ランスロットによる王妃の埋葬の場面を加筆し，ランスロットの "good ende" へとつながるようにしたのである．罪深きがゆえにそれを心から悔い，最期まで贖罪を全うしようとする深みを持ったグウィネヴィアの人間像を創り出したのである．

見事な翻案と言える．そしてこの15世紀に書かれたロマンスによってロセッティの絵が生まれ，またその絵がモリスに詩を書かせることになった．イギリス中世に創造されたグウィネヴィアのキスの拒否のシーンはいつまでも人々の心の中に生き続けるであろう．

参考文献

Armstrong, Dorsey. *Gender and the Chivalric Community in Malory's* Morte D'Arthur. Gainesville, Florida: UP of Florida, 2003.

Benson, Larry D. *Malory's* Morte Darthur. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1976.

Benson, Larry D. ,ed. and Edward E. Foster, rev. *King Arthur's Death: The Middle English* Stanzaic Morte Arthur *and* Alliterative Morte Arthure. TEAMS Middle English Texts Series. Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, Western Michigan U, 1994.

Beston, John and Rose Marie Beston. "The Parting of Lancelot and Guinevere in the Stanzaic 'Le Morte Arthur.'" *Journal of the Australasian Universities Modern Language and Literature Association* 40 (1973): 249-59.

Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer.* 3rd ed. Ed. Larry D. Benson. Boston: Houghton Mifflin, 1987.

Frappier, Jean, ed. *La Mort le roi Artu: Roman du XIIIe siècle.* Geneva: Droz, 1964.

Hissiger, P. F., ed. *Le Morte Arthur.* The Hague: Mouton, 1975.

Hollow, John. "William Morris and the Judgment of God." *PMLA* 86 (1971): 446-51.

Jaech, Sharon L. Jansen. "The Parting of Lancelot and Gaynor: The Effect of Repetition in the Stanzaic *Morte Arthur.*" *Interpretations* 15 (1984): 59-69.

Kennedy, Edward Donald. "The Stanzaic *Morte Arthur*: The Adaptation of a French Romance for an English Audience." *Culture and the King: The Social Implications of the Arthurian Legend.* Ed. Martin B. Shichtman And James P. Carley. Albany: State U of New York P,1994. 91-112.

Kurath, Hans, Frederick W. Langley, and Brian J. Levy, eds. *Middle English Dictionary.* Ann Arbor, Michigan: U of Michigan P, 1956-2001.

Lacy, Norris J., ed. And Martha Asher, et al., trans. *Lancelot-Grail: The Old*

French Arthurian Vulgate and Post-Vulgate in Translation. Vols. II & IV. New York: Garland, 1993, 1995.

Malory, Thomas. *The Works of Sir Thomas Malory.* Vols. II & III. 3rd ed. Ed. Eugène Vinaver and rev. P. J. C. Field. Oxford: Clarendon, 1990.

Micha, Alexandre, ed. *Lancelot: Roman en prose du XIIIe siècle.* Vol. VIII. Geneva: Librairie Droz, 1982.

Morris, William. "King Arthur's Tomb." *The Collected Works of William Morris.* Vol. I. 1910. Introd. May Morris. London: Routledge / Thoemmes, 1992. 11-23.

Rossetti, Dante Gabriel. *Arthur's Tomb. British Museum — Dante Gabriel Rossetti, Arthur's Tomb, a water colour.* The British Museum. 15 March 2013 <http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/highlight_objects/pd/d/rossetti,arthurs_tomb.aspx>

Tolhurst, Fiona. "The Once and Future Queen: The Development of Guenevere from Geoffrey of Monmouth to Malory." *Bibliographical Bulletin of the International Arthurian Society* 50 (1998) : 272-308.

Wertime, Richard A. "The Theme and Structure of the *Stanzaic Morte Arthur.*" *PMLA* 87 (1972) : 1075-82.